



girl meets girl,
war is over

文風 冴月

世界の始まりを告げるように青い鳥が鳴いて、今日の演習が終わった。汚れきった両手を見ると、うっすらと汗に濡れていて、まだまだだなと思って、ひとつ溜息をつく。こんなじゃ、ダメだ。そう思う。

遙かの水平線に、おもむろに太陽が姿を沈み隠していく。まるで交差点で別れを惜しむように。ゆっくりと、沈んでいく。そして、東の空から夜が這い寄ってくる。青黒い風と共に。どこか懐かしい匂いがした。

子供の頃、風邪で寝込んでいると、遠くから夕方を告げる鐘の音が聞こえてきた。しんと静まり返った部屋の中にまで、優しく入り込んでくる音が、やけに心地良かったのを憶えている。『施設』に入る前に煤で汚れた手を洗い、ぼんやりとそんなことを考える。

後ろから足音が聞こえて振り返ると、仲間の冥奈がいた。演習に邪魔になるだろう長い髪を、一本にきちんと結って背中に垂らしている。夜の風が、その黒髪を惜しげもなく揺らす。輝き出した星の下で、冥奈はとても美しかった。

「ひどい事故だったね」

小さな唇で、冥奈が呟いた。まるで階下で聞こえる母親の声のように優しい声で、そう呟いたのだ。

何と返事をして良いか分からずに、私は黙ったまま手を洗う。もうすっかり綺麗に見えたけれど、生憎薄暗くてよく分からない。

「でも、仕方がなかったのかもね。これは戦争だもの。敵はなんだってしてくる。そう思わなくちゃー」

死んでしまうわ。

冥奈は恐ろしく冷たい声で言う。私の心が震える。

死んでしまう。

そうだ。死んだんだ。

詩が好きだった紗奏。向日葵が好きだった紗奏。私の、妹。

妹の紗奏が死んだのは、先週だ。私の乗っていた戦艦が、彼女たちの乗った戦艦を敵船だと思い砲撃してしまったのだ。

ちょうどその一時間前に敵軍が私たちの戦艦を奪ったという情報が入ったのだ。あとで調べたら、その情報自体が誤りだったのだけど。

何にせよ、紗奏は死んだ。遺体も見つかっていない。戦艦は木端微塵だった。私の目から見ても、良い砲撃だった。これ以上ないくらいにうまく仕留められたと思った。

「元気、出してね」

冥奈が泣きそうな顔で、思い出したように笑う。すっかり日も沈んでしまっ、その表情が私

にはもうあまり分からなかった。

私もきっと、泣きそうな笑い顔で答えたのだと思う。

「ありがとう」

って。

夕食を食べ、夜間の訓練が始まる。風の中で空を見上げれば、星を食い尽くすかのような星々が空に蔓延っている。人は死んだら星になるという。あの中に紗奏もいるのだろうか。ちょうど隣には冥奈がいた。ずっと通った鼻梁が、どこことなく月のような冷たさをたたえている。冥奈は、人が死ぬとどうなると思っているのだろうか。

ふと、隊長が歩くのをやめた。全体がそぞろに止まっていく。

演習場まではまだ少し距離があるはずだ。

誰も口を開かない。ただ、空を見上げていた。

私もつられて、見上げた。

そこには、星が流れていた。青白い軌跡が多数、流れ落ちていく。夜空にシャワーを当てたらこんな感じだろうな、と目の前の光景に考えが追いつかない頭で、そんなことを思う。

星が流れる。

あれは、きっと人なのだ。

人は死んで、星になる。そして、いつかまた、流れ星となって地球に還ってくるのだ。輪廻だ。

「紗奏……」

気づけば、彼女の名を呼んでいた。

流れ星に願い事をすれば叶うという。

私は彼女の名を呼び続ける。

願い事だなんて、乙女なことを、信じて。

今この時だけは、戦場にいる私でも、ひとりの女の子に戻れることを信じて。

私は、紗奏のことを、呼び続けた。

夕暮れが迫っていた。名も知らない群青蝶たちは、ひっそりと森の奥深くへと帰っていく。帰る場所があるのは、羨ましい。

といっても、私に寝る場所がないわけではない。訓練を終えれば『施設』へ帰ることになっている。そこが私の居場所なのかは、分からない。

隊長が長い笛の音を響かせて、『施設』へ戻る合図をする。まるで空を引き裂くかのようなその音に、私は思わず身体をびくんとすくませる。

隣にいた白波は、心配そうに私を見る。

「なんでもないわ」

私の言葉は、夜が迫る強い風に飛ばされた。果たして白波の耳に届いたかは不明だ。それでも、彼女は怪訝そうな顔をしながら、こくりと頷いた。

白波は言葉を話せない。戦争のショックで言葉を話せなくなったのだと、冥奈先輩がこっそり教えてくれた。

白波の肩口までの、黒い髪が風に揺れる。対照的に白い彼女の肌は、まるで雪解け水を溶かして作ったのではないか、と思う程だ。

『施設』への道は、遠くはない。日没までには辿りつける。

そもそも、私たちの訓練は、『施設』の近場でしか行われぬ。もっと遠出しても良いのに、と思うこともあるが口にはしない。

だいぶ『施設』に近づいた時だった。轟音が大地を揺るがし、空を震わせた。藍色に染まりつつある大空が、思い出したかのように、大きく身震いをする。振動がお腹の下にまで伝わってくる。白波は咄嗟に私の腕に抱きついた。周りを見ると、みんな寄り添って固まっていた。

こんなことは今までにはなかった。橙色と群青色が狂騒する空に、大きなキノコ雲が見えた。どこか遠くの街が消し飛んだことは、想像に難くない。私たちは身を震わせた。まるで、あのキノコ雲が私たちを見下ろして、次はお前たちの番だ、とでも言っているみたいで。

ぎゅっと私の腕を握り締めている白波は、捨てられた子犬みたいに、ぶるぶると震えている。昔の記憶が蘇っているのだろう。

彼女と初めて出会った、あの炎に包まれた街を思い出すだけで、私の身体にも震えが走る。空の轟音が止み、再び隊は進みだす。

「もう、大丈夫だから」

白波を諭すように、私は告げる。

それでも、白波は目に涙をいっぱい溜めて、私を見るのだ。

――彼女を、ここに連れてくるべきじゃなかった。

私は後悔した。けれど、後悔しても、もう遅い。

「大丈夫、大丈夫だから」

ゆっくりと、白波は微笑む。私の言葉に安心したのだろう。

春の花がほころぶように笑う白波を見るたびに、私は戦争を恨む。あの火事にやられた街を思い出して、恨む。

そして、この重い、重い、白波のことを、私は、

どうしてこうなってしまったのだろうか。

休日に見ればさぞかし綺麗な青空に、数機の戦闘機が――少女たちを乗せた戦闘機が――ひっかき傷をつける練習をするみたいに、縦横無尽に走っている。今はそれが、嫌でも私に現実をつきつける。生温く吹きつける風が頬を撫でて、少しだけほっとする。

真昼の太陽は、鬼コーチのようにぎりぎりと照りつけている。

空はどこまでも続いているらしい。それが私には信じられない。遠い国の人々も、同じ空を見上げているのだと思うと、なんだか怖い。どうして怖いのか、それすら分からないけれど。恐らく、スケールが大きすぎるから、不安定な気持ちになるのだろう。どこか遠い国の人たちにも、私たちと同じように現実があって、生活があって、そして、戦争がある。

今日は爆音が聞こえないので、平和だ。柱に一本印をつける。冥奈との賭けで、爆弾が降らない平和な日と、そうじゃない日のどちらが多いか、というものだ。私は平和な日が多いことを願って、冥奈との勝負に乗ったのだ。今のところ、冥奈の圧勝だ。平和な日は勝負を初めてから両手の指で数えられる程度しかないのだ。

毎日のように、爆弾は降った。轟音と衝撃波を撒き散らして、街を破壊した。

私だって戦わなくてはならない。

でも。

ふと、不安になる。

こうして見えない敵と戦うことの意義を考えると、不安になるのだ。私たちはいったい何の為に戦っているのか。自分の為か、国の為か。それとも、大切な、誰かの為……。

脳裏に紗奏のことを思い浮かべる。

もう、戻っては来ない紗奏。

姉として、私は何かをできただろうか。

その答えを知っているものは、もうこの世にはいない。

―昨日の【星降夜】の所為で、なんだか気持ちがふらふらする。

紗奏。

彼女は死の間際に何を思ったのだろうか。そして、流星となって地球に還ってきて、今はどこにいるのだろうか。

ぼんやりと、視界を見るときもなしに見続けていた所為で、目の前に冥奈がいたことに気がつかなかった。

少し疲れた表情をしている。連日の猛暑は私たちの身体を蝕む。額の汗を拭い、彼女に近寄る

どうやら、彼女も演習中にそっと抜け出して、サボタージュしている最中らしい。

「なんだかなあ」

思わず言葉が漏れる。私の声は、木漏れ日に溶かされるように消えていった。

「これだけ暑かったら、サボりたくもなるよね」

冥奈はこくこくと頷くと、私の名を呼んだ。

「なに」

短く返事をする。喉が渴いてきた。上を見上げても、雲ひとつない青空が堂々と広がっているだけで、雨なんて一滴たりとも降る気配はない。

「人が死んだら、どうなると思う」

雨の降り始めた直後のような声で、冥奈は言った。その目はどこか遠くを見ている。

矢継ぎ早に、彼女は口を開く。

「私たちだって、いつ死ぬか分からないわ。ねえ、そうしたら……死んでしまったら……私たちはどうになってしまうの」

どこか泣き出しそうな顔で、冥奈は言う。さっきまで快晴だった空に、重たい雲が垂れ込めてきた。森の中では太陽が見えなければ、方角が分からない。帰り道が探せないな、と冷静な心の部分が考える。

「死んだら、さ」

けれど、口は無意識に動く。いや、意識はしているのだ。でもそれは頭で考えている言葉ではない。心が、否、私自身から滲みだした“声”を、私が発しているのだ。

「死んだら、それまでだよ」

何にもなりはしないよ。

紗奏は星になどなってはいない。人は死んだら星になるなんて、真っ赤の嘘だ。

人は死んだらそれまで。死、しかないのだ。

だから、紗奏は死んだままだし、私や冥奈が死ねば、死んだまま、それだけなのだ。

ぽつぽつ、羽ばたくのに疲れた小鳥のような音を立てて、雨が降り出した。大きめの粒は、まるで誰かの涙のようにも見えた。

「ねえ」

冥奈が私を見る。雨粒に濡れた顔は泣いているようでもあって、どきんとした。

「冥奈」

冥奈が次の言葉を言う前に、私が彼女の名前を呼ぶ。

「大丈夫。私も冥奈も、死なないわ」

これは昔、母に言われた言葉だ。大丈夫、貴女たちはしないわ。

「だからね、何も心配することはないの」

濡れ始めた彼女の頭を撫でる。黒い河のような髪の毛は、湿っていながらも私の掌を心地よく受け入れる。

ありがとう、と一言、冥奈は言って、空を見上げた。大きな彼女の瞳から、大粒の雨が垂れ始める。

空は黒々とした雲で覆われ、帰り道も分からない。

でも、それで良いと思った。それでも良いと思ったのだ。

帰れなくても、ここには冥奈がいる。星になれなかった紗奏はもういないけれど、なにより、私がこうして生きているのだ。

だから、今だけは――。

「冥奈」

彼女のほっそりとした掌を握る。細い、細い指が、とても暖かい。

今だけは、こうして雨に打たれていようと思うのだ。

どしゃぶりの雨がようやくやんだ。最近、空の様子がおかしい。さっきまで晴れていたかと思えば、数分後には嵐がやってくる、なんてこともざらだ。それが演習の最中にくるのだからたまたまのものではない。『施設』に来てからもうどれだけ経ったのか。暦の上では今が夏なのか、秋なのか、それさえ分からない。

死んでしまったみたいに、ぴったりと目を閉じて眠る冥奈先輩を見つつ、そんなことを思う。窓の外には、綿菓子や千切ったような、大きな雲の塊がいくつも浮かんでいて、その合間を縫うように、真昼の太陽が大地を照らしている。風はほとんどないようだ。

冷たい水でタオルを濡らし、しっかりと絞って、先輩の小さなおでこに乗せる。

ぴくんと瞼が震えたように見えたが、まだ眠ったままだ。

先輩は昨日の演習時に降った大雨の所為で風邪をひいてしまった。一緒にいた女の子も体調を崩して寝込んでいると聞いた。名前を教えて貰ったけど、知り合いの少ない私には分からなかった。先日起きた戦艦誤爆事件でなくなった子のお姉さんだということは分かった。

ここにいる私たちにとって、死はリアルだ。今こうして目の前にいる先輩だって、いつ死ぬか分からない。そして、私も……。

夕食時、白波と一緒にご飯を食べていると、冥奈先輩が食堂に入ってきた。

「心配かけてごめん。もうだいぶ良いのよ」

そう笑う彼女は、それでも疲れた表情でそう言った。

隣の白波はじっと私たちを見つめたまま。言葉を話せない白波は、何を考えているか時折分からない。

きよろきよろと冥奈先輩は、辺りを見回す。

「なにかお探しですか」

尋ねてみると、一緒に風邪を引いた子を探しているらしい。私もつられて首を回すけれど、もとよりどんな顔かも知らないのだ。見つかるわけがない。

ひとつ溜息をついて、

「いないみたい」

冥奈先輩は肩を落とした。その人はまだよくなっていないのだろうか。

なぜだか私の気持ちまで沈んでいく。深い海の底へと潜っていく潜水艦のように、ひっそりと、音もなく。

どうしてだろう。

どうして、だろう。

知り合いでもない人の体調なんて、気にしたって仕方ないじゃないか。それとも、落ち込む先

輩の顔が辛そうだからなのか。

いや、違う。

きっと、これは……。この醜い感情は、嫉妬だ。

冥奈先輩が心配しているその少女への、嫉妬だ。

嫌だ。そう思う。自分はなんて醜いのだろう。

「ご飯、貰ってくるね」

先輩は配膳コーナーへと歩いて行った。いつもの私なら、体調の悪い彼女になど行かせなかったのに。

冷静になろうとすればするほど、心の中の黒い気持ちはむくむくと鎌首をもたげてくる。

憎い。

冥奈先輩の、友達が、憎い。

戦争に身を置いてきて、敵軍のこともひどいことをする奴らだって思ってきたけれど、それと同じくらいに、今の私は憎悪で満たされている。

『戦線』に来た頃、私は阿修羅になろうと思った。敵が憎かったし、なにより戦争なんてものが大嫌いだった。はやく終われば良いと、そう思った。そのためには、私が終わらせてやるって、そう思った。阿修羅になれば、それができるとさえ、思ったのだ。

ふと、袖を引く力に気づいて、隣を見れば、泣き出しそうな白波がそこにはいた。セミショート黒髪が、震えるように揺れている。

目は口ほどにものを言う、というけれど、白波の真っ黒な瞳は、私の心を見透かされているようで思わずたじろぐ。さっきまであらぶっていた気持ちが、静かになっていく。

椅子に腰を下ろすと、白波も袖を握った手を放した。

遠くから冥奈先輩がやってくるのが見える。

どうすれば良いのだろう。

私には阿修羅になるなんて、無理だったのか。

冥奈先輩の大事な友達に、暗い感情を抱いて、自分が何でもできると思い込んで……。

「どうしたの、二人とも」

私と白波の微妙な空気を感じ取ったのか、先輩が訊いてくる。

「水菊が何かしたんでしょ」

白波を見てから、私に視線を合わせる。からかうように、先輩が私の名前を呼んだ。それがなんだか嬉しくて、本当は腹を立てるところなのだろうけど、笑うように私は言う。

「どうでしょうね」

今はこれで良いのだと、少しだけ思えた。

何かが始まる予感があった。最近の空模様の不安定さと、周りの人たちの不安定さはどこか似ていた。

言葉を話せない私は、目で見て、指で触って、鼻で嗅いで、耳で聴くしかない。

そんな私だから、敏感に感じ取れたのかも知れない。

何かが起きる。妙な――本当に妙だけれど――不安と、少しの、何かが始まるという、期待とが入り混じった感情に包まれる。

隣ではいくらか落ち着いたのか、水菊がもぐもぐと夕食を噛んでいる。私はとっくに食べ終わっていたので、水菊と、対面に座る冥奈を交互に眺める。冥奈は水菊の先輩だ。『施設』では先輩後輩といった関係はない。彼女たちはここに来る前にそういう関係だったのだ。

二人がぽつぽつと言葉を交わしているのを、見るともなしに見る。私は話せないから、ただ聴くだけだ。水菊の小さな可愛らしい唇が動く。

水菊と出会った日のことを思い出す。

身体が震えるのが分かる。

あの日。

あの日がなかったら。

そんなことをたまに思う。

あの火事の日がなかったら、私は言葉を失わずに済んだだろうか。

しかし、あの日がなければ、水菊と出会うことはなかったのだ。水菊に救ってもらうことなど、絶対になかったのだ。

あの日は朝から不思議な感じがしていた。ちょうど今みたいに、何かが起こるような不安と期待があった。

午後だった。太陽が西の空に傾きだした頃、轟音が街を包み、続いて衝撃が津波のように襲ってきた。お父さんは仕事に行っていて、いなかった。お母さんの悲鳴が隣の部屋で聞こえたけれど、鼓膜を破るような轟音に、全ての音がかき消されてしまった。何も聞こえない時間が、数分、いや数時間も続いたかに思えた。実際には数秒の出来事だったはずだけれど、私には永遠にも思えたのだ。

壁はあちこち崩れ、埃と瓦礫に埋もれそうになりながら、私はなんとかお母さんのいる部屋へと這い寄った。

そこにお母さんはいなかった。あったのは瓦礫と、そこにへばりついた真っ赤な血と、精肉店に並んでいるようなグミみたいな物体だけだった。それがお母さんだった。

声にならない悲鳴を上げた。もう何も考えられずに、涙も出ずに、私は獣のように声を出した

。それはやがて声でもなくなり、ただの音となって、血と火薬と土の匂いがする街に響いて行った。

辺りの家々から火が上がり始めた。火事だ。叫ぶことに疲れた私は、ぼうっと座り込んでいたけれど、やがてここから逃げなくては、と思った。死んでしまったお母さんに一言だけ別れを告げた。いってきますって。

心が壊れてしまったんだと思った。

お母さんが死んで、街が壊れて、とてもとても悲しいはずなのに、涙がちっとも出なかった。炎に揺れる街をあてもなく走り続ける。気づけば裸足だった。指先が切れて、炎のように真っ赤な血が溢れる。

それが、今の私にとって、一番確かなものだった。

私が生きている証。

この痛みが、それを教えてくれる。忘れさせないでくれる。

やがて煙に前も見えなくなって、辺りも暗くなりだした時、戦車の走行音が聞こえた。音のする方へ駆け出す。足が痛んだけど、構わずに私は走った。

瓦礫に埋もれた狭い路地は燃えていなかったのだから、そこを抜ける。

すると、大きな戦車がいた。猛スピードで私めがけて走ってくる。最後の力を振り絞って、私は横に飛んだ。なんとか轢かれずに済んだ。腕と背中を家の残骸にぶつけて、息が出来なくなる。

戦車は少し進んで、やっと止まった。中からひとりの女の子が現れた。ショートボブの茶色い髪が、夕焼けと火事の赤に照らされて、ひどく綺麗だった。

「あんたね、いきなり出てきて、死ぬ気なの」

いきなり罵倒された。

普段、あまり怒られることのない私は、それだけで身体が竦み上がってしまったけれど、それでも人の声を数年ぶりに聴いた気持ちになって、安堵した。

「な、なんで泣くのよ」

言われて気がついた。頬を触ると濡れていた。ごしごしと両目を拭っても、後から後から涙が溢れてきて、止まらない。

困惑した表情の少女に、お礼を言おうと思った。

けれど、声が出ない。

愕然とした。それでも、うっすらと気づいていたのだ。お母さんの死体を見て、私は叫んだ。あの時すでに、私は声を捨て、音を叫んでいた。もうそれから言葉を話せないような気がしていたのだ。

口をぱくぱくする私に、

「あなた、話せないの」

少女は暗い表情でそう言った。こくこく頷くと、彼女は悲しそうな顔をした。

「私は水菊よ。あなた名前は……って話せないのか」

落胆する水菊に、私は地面に文字を書いた。硬い地面は、辺りの炎で火傷するほど熱くなって

いた。

「白……波……。あなたの名前は白波というのね」

また、こくこく頷く。それから、もう一行、腫れつつある人差し指で、文字を紡ぐ。

『ありがとう』

汚い字なのに、水菊は笑って私の頭を撫でてくれた。

あの日助けてくれた水菊は、今では私のことをあまりよくは思っていないみたいだ。言葉も話せないし、何を考えているか分からないだろうし。

彼女の負担になりたくない。彼女の役に立ちたい。

そう思っても、私には何もできない。

ようやく水菊と冥奈は食事を終えた。

あと三十分で夜間訓練の時間だ。いつもはここでのんびりと過ごす。

けれど、今日は違った。

やはり、予感当たっていたのだ。何かが起こる。そう思っていた、私の予感。

振動と、轟音が、辺りを揺らす。

何かが、起こる。

これから、起こるのだ。

私に、何ができるだろうか。

目が覚めると、窓から見える景色は闇だった。時計を見ればもう夕食の時間だ。汗をかいた服を取り替え、洗面台で顔を洗う。まだ身体がふらついている。熱もあるようだ。

昨日の大雨で私は風邪を引いた。一緒にいた冥奈はどうだろうか。

おぼろげな意識のまま、部屋を出る。みんな夕食をとっているのだろう。いつも以上に静まり返った廊下に、私の不安定な足音がこだましては消える。

冥奈の部屋のドアをノックする。返事はない。ドアには鍵がかかっていた。もう食堂に行っているのかも知れない。

食堂は一階だ。そう遠くはない。体調は悪いけれど、それでも何かを食べておかなくてはならない。夜間訓練はお休みさせて貰おう。そんなことを、回らない頭で考えていると、突然爆音が響き渡った。遅れて振動が襲ってくる。たまらず床に座り込む。がたがたと地震でもあったかのように『施設』の壁が揺れる。窓硝子にひびが入った。やがて揺れがおさまると、階下で悲鳴が聞こえた。食堂にみんないるのだ。そこで何かが起こっているに違いない。

なんとか階段まで辿りつくが、思うように足が動かない。

どうすればいいのだろう。

またも、音と振動が轟く。

冥奈は……。

大丈夫だろうか。彼女もきっと体調がよくないはずだ。

ふと紗奏のことを思い出した。

死んでしまった、私の妹のことを。

私と紗奏は、姉と妹という関係だけれど、双子なのでそれほど意識もない。ただ、姉としてしっかりしなくては、といつも思っていたけれど、紗奏は妹という立場に甘んじているわけでもなかった。

詩が好きだった紗奏はよく勉強机に座って、ノートに文字を書き込んでいた。彼女の好きなオレンジペコーの匂いが脳裏に浮かぶ。詩や小説を日々書き綴っていた紗奏。その腕は徐々に伸びていって、そこそこ有名な賞も貰ったことがある。

私とは違うのだ。紅茶なんてお洒落なものなんて飲まない。せいぜいコーヒー牛乳が関の山だ。姉のくせに、紗奏よりもお子様だった。

回想は甘くて優しいけれど、それは本当にただの現実逃避でしかなかった。

再び訪れる爆音に、身体が震えだす。

紗奏は死ぬとき何を思ったのだろう。今の私みたいに、爆発と振動に何もできずにへたりこんでしまっただろうか。

それとも、果敢に立ち向かったのだろうか。

ダメだ。

こんなじゃ、ダメだ。

前にも思ったはずだ。もっと、もっと強くならなくては。紗奏の分まで生きるんだ。

足に力を込めて立ち上がる。必死の思いで、一階へと降りる。煙が辺りに立ち込めていて、何も見えない。

食堂のある場所へ一步踏み出す。瓦礫に躓いて、転んだ。

変な声が腹の奥から出て、恥ずかしい。幸い、周りには誰もいないようで、

「――だ、誰」

いた。

すぐ近くに短い髪の少女が立っていた。背は私よりも低い。薄明かりに照らされて、茶髪だと分かる。なかなか可愛らしい顔をしている。

「大丈夫、あなたの味方よ」

そう言うと、彼女はほっと安堵したようだ。

「ごめんなさい。さっきまで寝ていたから、状況が分からないのだけど」

説明を求めると、少女は食堂の近くで爆発が起こったことを告げた。そして、衝撃から逃れようと周りの人々と一緒に逃げ惑ったのだそうだ。

他の人たちは散り散りに逃げたのだろう。

「人を探しているんです」

少女は切実な顔で言った。

「大事な、人なんです……」

言葉が終わるか終わらないかのうちに、再度の爆発が起きた。近い。咄嗟に身を低くする。粉塵が烈風となって襲ってくる。壁に背中を打ちつけて、視界がちらつく。

呻く少女に手を差し伸べる。

なんとかふたりで立ち上がる。

冥奈は大丈夫だろうか。

紗奏のいない今、私の知り合いは冥奈だけだ。彼女は今どこで何をしているだろうか。ちゃんと、生きているのだろうか。

「行こう」

力強く、彼女の手を引く。それで何かのスイッチが入ったのか、彼女もしっかりとした足取りで歩きだす。

「あなた、名前は」

暗がりやを、瓦礫を避けるように歩く。私の質問に、茶髪の彼女は答える。

「水菊です。水に、お花の菊という字で」

途中、月明かりが差しこむ場所で座りこむ。今日は満月だった。月は不思議な魔力を秘めている。だからだろうか。だから、今日こんなことが起こっているのだろうか。

「ふたり……大事な人なんです。ひとは大事な先輩……そして、もうひとは……」

水菊はそこで言葉を区切った。

どこか言いにくそうに、けれども言わなくてはならないような複雑な表情で、

「私、あの子のことをどう思っているのか、分からないんです。いつも邪険に扱ってしまうんです。でも、本当は……」

その先は彼女自身にも分からなさそうで、私も何も訊かずにただ月を見上げた。

月は、等しく私と水菊を照らす。

「ごめんなさい、いきなりこんなこと、言って……」

「ううん、あなたにとってはすごく大事な友達なのよね」

「はい……」

そう頷く水菊は、決意でみなぎっていて、私もなんだか気持ちがぴしっと締まってくるのを感じた。

「ところで、まだ名前を訊いていませんでしたね」

水菊は思い出したように、私を見る。そうだった。私も気が動転していたんだな、とそう思う。

「私の名前は――」

途中で、私を呼ぶ声が遮った。

「紗乱！」

その声は冥奈だった。

「さ、みだれ……」

水菊は驚いた顔で私を見る。

どうしたのだろう。

尋ねようとして、またもや近くで爆発が起きた。

壁が崩れ、ひとりの少女が姿を現す。

それは、私のよく知る人物だった。

振動がやんではまた唸りを上げ、終わったかと安堵すれば再びその凶暴な顔を晒す。

耳が痛い。

言葉が話せなくなって、聴覚が敏感になったと喜んでいて。けれど今はそれが私を蝕む。

度重なる轟音と爆発と振動が、私の身体を壊していくのが分かる。隣をひた走る冥奈も、息を切らしている。

水菊はどこに行ったのだろう。

最初の爆発が食堂に起こって、粉塵と絶叫にかき消され、自分の身を守るのに精いっぱい、水菊の姿を見失ってしまった。

彼女の役に立ちたい、とそう思ったのに。

私には何もできないのだろうか。

冥奈は走りながら、水菊の名前を呼んだ。それから、彼女の大切な友達の名前を。

「水菊はそこまで、遠くへは行ってないと思う」

冥奈が説明する。廊下は爆発の影響を受けていないらしく、電気が灯っていないこと以外はいつも通りだ。まるで夢の中にいるみたいだった。もしかするとこれが今日の夜間訓練なのでは、とさえ思ってしまう。しかし、これは夢ではなく現実で。訓練ではなく実戦なのだ。

「それより、紗乱は大丈夫かしら」

小さな声で、冥奈が呟く。紗乱というのは、先日亡くなった紗奏という女の子のお姉さんなのだそう。そして、冥奈の大切な友達。

水菊は……。

私の脳裏に浮かぶのは彼女のことだけだ。

もう誰も失いたくない。あの火事に包まれた街で、お母さんの残骸を目の当たりにした日を思い出す。

水菊が私を助けてくれたのだ。

どれだけ足手まといになったって良い。私は、私が良かれと思ったことをするだけだ。

水菊を守りたい。

ただ、それだけだ。

二階の比較的壊されていない廊下を、振動に負けじと走っていると、割れた窓ガラスから綺麗な満月が見えた。

漫画の世界の月みたいに真ん丸で、場違いにも笑いそうになる。

「どうしたの、白波」

怪訝そうに訊く冥奈に、私は首を横に振る。

伝えたいことがあっても、私にはそのすべがない。

首を横に振って、なんでもない、としか言えない自分が、非常にもどかしくなる。喉のあたりを掻き毟って、その奥にある『言葉』を引きずり出したくなる。

もちろん、そんなことはできないのは分かっている。

分かっているからこそ、悲しい。

その時、再びの爆発が起こった。大きな衝撃が足元に走る。

あと思った時には、遅かった。

丈夫そうな石を組んで作られた床が、コメディ漫画のように崩れ去る。

咄嗟に手を伸ばすが、意味などなかった。全てが落ちていく。私と冥奈は二階の崩落に巻き込まれ、一階へと叩きつけられた。

途切れそうになる意識をなんとか保ち、必死に酸素を吸う。肺が苦しい。腕が痛い。もしかすると骨が折れてしまったのかも知れない。

上からの落下物がなくて助かった。冥奈がすぐに私を抱き起してくれた。

「白波、白波！」

こくこくと首を縦に振る。大丈夫です、と冥奈に告げる。

彼女は安心して、それと同時に顔をしかめて唸る。見ればお腹から真っ赤な血が溢れていた。思わず手を伸ばすと、左手に激痛が走る。普通ではありえない角度にひしゃげた腕を見て、頭がくらくらする。

どうして、こうなってしまったのだろう。

この世界にリセットボタンがないのは知っている。やり直しなんて効かない。

全て、全て。私にはそういったことの全てが分かかってしまって、悲しい。つらい。どうせなら夢見る子供のままでいられれば。いつまでも楽天的に、現実から逃げて生きていければ、どれだけ幸せなことだろうか。

痛みに、思考が途切れる。

冥奈は自分で止血を始める。上着を脱いで、ぎゅっと縛る。時折、可愛らしい顔を歪めては、また、ぎゅっと縛っていく。どうやら血は止まったみたいだ。

辺りの暗闇に目が慣れてくると、ここはちょうど食堂前の廊下だということが分かった。

食堂へ通じる道は瓦礫に埋もれてしまって、戻ることもなんてできないと暗示しているみたいだった。

その反対の道は、ぽっかりと暗闇に大きな口を開く化け物みたいに、こちらを見ているのだ。

遠くから風が吹いた。

あっちだ。

あっちに、何かがいる。

またしても妙な予感が私の身体を走る。

それは私だけではないようだった。

「あっち、だね」

冥奈にも分かったみたいだった。

痛む身体を引きずって、闇の奥底へと、進んでいく。

もう後ろを振り返る必要なんてなかった。戻れないのなら、前を見るしかないのだ。

暗闇の廊下を進んでいくと、月明かりに照らされて、ふたりの少女がいるのが分かった。

ひとりは白波で、私はひどく安心した。

隣にいるのは誰だろうか。整った顔立ちをしている。

と、冥奈が一步前を出て、掠れる声で叫んだ。

「紗乱！」

今、なんと言ったのだ。

白波は愕然と、その隣の少女を見つめている。小さく唇が動く。

「さ、みだれ……」

信じられないといった顔だ。隣にいる少女、紗乱は、冥奈の大切な友達。水菊の憎む、女の子

。

四人の沈黙を破るかのように、突然壁が爆発と共に吹き飛んだ。

細かな瓦礫が顔に当たる。

そこに現れたのは、満月をバックにした、綺麗な少女だった。

腰まで垂れた黒髪が、紗乱に似ている。

そこで、突然現れた彼女は、可愛らしい口調で言った。

「助けにきたよ、紗乱」

笑顔で、そう言ったのだ。

「助けにきたよ、紗乱」

と、チョコレートケーキみたいな声で黒髪の少女は言った。

夜空に浮かぶ満月を味方につけたように、不敵に嗤って、紗乱を見やる。

懐かしげに。

狂おしげに。

悩ましげに。

愛おしげに。

「紗奏……」

紗乱は信じられないといった顔で、短く少女の名を呼んだ。

この少女が紗奏……。紗乱の妹……。

先日の戦艦誤爆事件で、妹の紗奏は死んだのではなかったか。なのに今こうして、『施設』を襲った張本人として私たちの前に――正確には紗乱の前になのだろう――現れたのは、いったいどういうことなのだろうか。

そもそも死んでいなかったのか。

「なん、で……紗奏……」

事態が飲み込めない紗乱は、まだ口をぱくぱくさせている。白波の隣にいた冥奈先輩が、動揺しつつ口火を切る。

「どうして生きているの、紗奏。あなたはこないだの事故で死んだはずじゃ……」

それを聞いた紗奏は、不敵に、素敵に嗤う。三日月みたいに唇をひん曲げて。

「私は『死』んだわ。けれど、それは『戦線』における『死』なのよ」

一歩、紗奏は踏み出す。紗乱はぽかんと彼女の動作を眺めている。

「私が『死』んだのは、病気が治ったからなの」

病気。

治ったのなら、死ぬはずがないのではないか。むしろ、紗奏は今こうして私たちの目の前にいるのだから、きちんと生きている。死んでなどいないのだ。

「病気って、なによ、紗奏」

不安げに、紗乱がようやく口を開いた。紗奏と紗乱は見れば見るほど似ている。一瞬でも目をそらせば、区別などできないみたいに。

「私たちは病気だったのよ。ウォーパラノイア……戦争偏執病とも呼ばれているらしいわ」

淀みなく、けれど淡泊に紗奏は説明を始める。夕食のレシピを暗唱するように、淡々と。

「ウォーパラノイアに罹った人たちは、自分が戦争に巻き込まれたという妄想に取りつかれてしまうの。そして、ありもしない事件や事故をでっち上げて、周りの人に危害を加える恐れがある……。だから、私たちは『施設』に隔離されていたわけ」

ひとつ、息を吸って、

「『戦線』と呼ばれる疑似的な戦争体験をさせる場所を設けて、私たちに本当に戦争しているように思わせたのよ……そうすれば心は平穏を保てるの。戦争なのにね、おかしいよね」

紗乱も、私も、冥奈先輩も、白波も、誰もかれも紗奏の話を聴くだけだ。

これは本当のことなのだろうか。

分からない。

確かめるすべなどないようにも思う。

「思い出して、紗乱。あなたは『施設』に来る前に何をしていたの」

ふと私も過去を思い浮かべる。

『施設』に来る前、私は何をしていたのだろうか。そもそもいつからここにいるのだ。戦争はいつから始まったのか。どうして私たちが『戦線』になど出ているのか。見えない敵とは、いったいどこの国なのだ。

分からない。

判らない。

解らない。

「うそ……」

思わず、声が漏れた。

しかしそれは紗奏の言葉を認めた意味の声だった。

「そこの誰かさんも、紗乱と同じようにウォーパラノイアに取りつかれているだけなの。だからね」

雲が風に流されてきて、満月を隠そうとする。うすら明かりの中で、紗奏はもう一度、嗤ってこう言った。

「だから、助けに来たんだよ……紗乱」

「紗奏……」

ぐったりとうなだれる紗乱。

その様子は少し可哀相な気もしたけれど、無様だなと心の中で揶揄する自分もいた。

「紗乱。帰ろう。一緒にいようよ。ずっと、ずっと。病気だって、私みたいに突然治っちゃうかも知れないんだから……」

音もなく紗奏は私と紗乱のそばに歩み寄る。すっと紗乱の顎に細い指を這わせた。

薄い雲がなくなり、月の光が私たち五人を照らし出した。

帰ろう、紗乱、と短く言って、紗奏は紗乱に接吻をした――。

――かのように見えた。

「嘘よ！」

刹那、小気味良い音と共に、紗奏の身体がよろめいた。紗乱が頬をぶったのだ。

「嘘よ、嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘――！」

紗乱が叫ぶ。

「あなたは偽物よ。紗奏じゃない……嘘、嘘なんだ……」

うわごとのように繰り返し、紗乱は黒い一丁の銃を抜いた。

夜の寒さに似た銃は、ぴたりと紗奏の額に向く。

チャンスだと、無意識に思った。いや、本当は意識していたのだとも思う。

この角度なら二人に気がつかれることはない。

腰から銃を抜いた。

なるべく身体を動かさないように、狙いを紗乱に向ける。後頭部。この距離で撃てば即死だ。
冥奈先輩の友達。でも、私にとっては、憎い存在。

心の中で短く祈りをささげて、引き金に指を一一。

「だめよ、水菊」

冥奈先輩の声に振り返ると、先輩の銃が私に向いている。

「紗乱は殺させないわ」

ああ。きっと、私は先輩に嫌われてしまったのだ。

でも、だったらせめて……。

せめて、この紗奏だけは。

先輩から大切なものを奪った人間として、彼女の記憶にとどまれるなら……。

そう思った時、冥奈先輩の後ろで銃を構える人影が見えた。

「白波……」

がたがた震えながら、先輩に銃を向ける白波の姿がそこにはあった。

その時、初めて彼女の想いが伝わってきたように思えた。

『水菊は、私が守る』

言葉にならない言葉で、私に伝えているみたいだった。

私たち五人は、互いに銃を向け合っていた。

満月がそれを、美しく、そして残酷なまでに確かに照らし出す。

誰も動かない。

誰も動けない。

月だけが、光を発していた。

月は音もなく、世界を照らす。国も、人種も、病気も、関係ない。月の光は全てのものに、平等に降り注ぐ。

『施設』の一角、月光だけで照らし出された、五人のシルエット。

誰も動くものはない。

それぞれが、それぞれに銃口を向け、敵意をむき出しにする。

さっきからずっと震えている少女、白波。

声が出せないのか、今にも落としそうになる銃を、しっかりと両手に握り込んでいる。うっすらと浮いた血管が、青白い満月にそっくりだ。

白波に銃口を向けられている少女、冥奈。

どうして白波に殺されそうになっているのか、一瞬分らない顔をし、それから自分の標的に目を移し、納得した顔で笑った。

「そう。そういうことね」

冥奈に銃口を向けられている少女、水菊。

「冥奈、先輩……。やっぱり、あなたは私なんかより、紗乱のことを……」

両目に浮かび上がる涙は、海洋を思い出させるのには十分だった。どこかから吹いてきた風が、水菊の瞳から雫を舞い上げる。月光に舞う粒子が、そこにひとつの世界を創り出す。

それでも彼女は、銃を放さない。

水菊に銃口を向けられている少女、紗乱。

「どうしたの、あなた……水菊……」

信じられないといった表情の紗乱。

丸みを帯びた頬に月の魔力が宿ったみたいに、ひどく美しい。名匠が拵えた陶磁器のような肌は、とても病気に罹っているとは思えないほどに瑞々しい。日々の手入れをあまりしない紗乱は、それでも永遠の美貌を勝ち取った古代の魔女のように、以前と変わらない。

「なん、なのよ……みんな、みんな、分からないわ。私には、分からない……」

泣きそうになって、紗乱は銃を落としそうになる。指が震えている。葉の散り終わった冬の大木のように、風にすら負けそうに。

「ねえ、嘘なんでしょ……全部、嘘だって言ってよ。ねえ……紗奏」

紗乱は、狂気に支配された瞳で、私を見た。

「嘘じゃないよ」

嘘じゃない。全てはウォーパラノイアがいけなかったのだ。私は運よく治ったけれど、今のところ治す薬はないし、たまたま治るのを待つしかない。

けれど、それが私には耐えられない。

紗乱がない世界なんて、私には考えられない。

「嘘じゃない。だから、ねえ、帰ろう、紗乱」

紗乱と一緒に帰りたい。私たちの家に。お母さんとお父さんのもとに。お母さんの得意のカレーを、また四人で食べたい。お父さんに連れて行って貰った水族館で、紗乱と一緒にペンギンを見たい。

「紗乱……」

「紗奏……」

風が、ひとつ強く吹く。

私たち五人の髪が、ゆらゆらと舞う。踊る。まるで魂みたいだ。私たちのこの、ちっぽけな身体の中にきちんと納まっている魂みたい。ゆらゆら、ふらふら。不安定に、不確定に、揺れている。

誰も動かない。風がやめば、それまで。

誰も引き金を引けない。

私はただ、紗乱に銃口を向けられているだけ。

ウロボロスの輪なら、私が白波を撃つべきなのだろうけれど、生憎彼女に恨みなどない。

誰も動かない。

誰も動けない。

もしこのまま時が止まれば――。

そんなことを思う。

さっきから遠くで聴こえていた声が、だんだんとはっきりしてきた。

私が振り切った『施設』の管理者たちだ。

だめだ。

今ここに彼らが来てしまったら、この月の下の永遠は失われる。

せっかく、私はこうしてずっと紗乱と一緒にいられるのに。

もっともっと、いろんなことをしたいのに。

私と一緒になら、紗乱だって病気を治していけるのに。

なのに、それができない。

でも、せめて今だけは。

この一瞬だけは。

私は紗乱と一緒にいられる。彼女と共に帰ることだってできる。この一瞬が、永遠に続けば、それでいい。

しかし、永遠が崩壊するのは一瞬だった。

苦労して作った積み木の家が、目を放した刹那に、崩れ去るように。

永遠を願う私の思考を破るように、銃声が『施設』にこだました。

そこで、私の意識は途切れた。

もう、何も見えない。

けれど、最後に見えた紗乱の涙を、私は永遠に忘れないと思う。

ひどく綺麗で、まん丸で、満月みたいな紗乱の涙を、永遠に恨むと思う。

撃った。

私が撃った。

「さようなら、紗奏」

それから、私たちは、

<了>